風の一座

劇団風の子

生きるということについて　命というものについて

ひろげよう　かなでよう　遊び心のハーモニー

作・構成演出／中島研　演出助手／大澗弘幸　美術／有賀二郎　音楽／曲尾友克
衣裳／岡本颯子　振付／桐山良子　制作／森恭次郎

先生・子どもたちの感想

●小学校の演劇教室を考えているところでご招待いただきました。見る前は、正直、高学年の児童は少し飽きてしまうかなと思ったのですが、劇が進むにつれ、細かいところにもちょっとした工夫が感じられ、昔話では話に引き込まれ涙してしまうほどでした。小学校の劇にも生かせる内容だと思いました。（小学校教諭）

●親ダヌキのちょうべいが殺されてしまったとき、子どもの豆太がかわいそうになったけど、おじいさんのついたやさしいウソのおかげで、豆太がきずつかずにすんだと思いました。それから、最後の紙飛行機はなかなかとばなかったので練習したいです。（六年生）

●三人で歌っているとき、息が合っていてすごくきれいでした。その中でも一番心にのこったのは、まめ太がおとうさんがしんだことを知らないで、おじいさんがそのことをまめ太にわからないように手紙をよんだりしているところです。この劇をみて、ひとつの命がなくなると、ぜったいだれかがかなしむということが深く感じられました。（四年生）

●ぼくは最初はびっくりしました。でも、口の中に空気をいれて、それでキャッチボールをしていておもしろかったです。「おく山ばなし」で、おじいさんはまめ太を自分の孫みたいにしていて、おじいさんはなつかしさを感じたのかなと思いました。おじいさんは今まではタヌキを食べていたけど、まめ太とであってタヌキの側になってみるとかわいそうに思ったと思う。（六年生）

●私が一番印しょうにのこっている場面は、豆太のお父さんが、狩人にころされてしまう場面です。おじいさんは、はじめ豆太がころされてしまったと思って心配したと思うけど、そのあと豆太がきて、お父さんがころされてしまったと分かって、豆太がおじいさんにいろんなことを聞いて、余計に二人ともかわいそうだったと思います。

でも私たちは動物を食べてくらしていて、動物を何びきもころしてしまっているんだなあということが、このお芝居を見て一番分かったことです。だから私は死ぬまでしっかりと生きたいです。（六年生）

●豆太のお父さんが死んじゃったのに、豆太はお父さんが死んだことを知らなかったから、かわいそうだったです。（三年生）

●この劇を見て命はどんな動物でも同じだとわかりました。虫でも魚でも人でも。今までそんなこと考えていませんでした。どんな命も大切にします。（四年生）

劇団風の子の活動

劇団風の子は、まだ戦後の焼野原が残る東京世田谷で、子ども会や子ども文庫の活動をしていた多田徹を中心とする若者たちによって、1950年に始められました。

「日本の未来を考えることは、これからの日本の子どものことを考えること」を劇団の理念とし、以来、70年以上、“子どものいるとこどこへでも”を合言葉に、北海道から沖縄まで、全国で公演を続けています。

また、1970年代からは、ドイツ、カナダ、中近東、東南アジア、アフリカ、アメリカ、ロシア、韓国、中国など海外での公演も積極的に行ってきており、国際的な文化交流の輪も年々ひろがってきています。

劇団風の子は、これからも子どもの目の高さから新しい創造に挑み続け、視野を世界に広げ、子どもの育つ地域に目を向け、先生方や子どもを取りまくおとなたちと連携し、子どもたちの心の中にとびこんでいきたいと思っています。

〈主な受賞作品〉

「小さい劇場」都優秀児童演劇選定優秀賞
「世界をまわるトランク劇場」児童福祉文化賞
「宝のつるはし」都児童演劇祭優秀賞・児童福祉文化奨励賞
「チワンの星」都優秀児童演劇選定優秀賞
「突然の陽ざし」都優秀児童演劇選定優秀賞・文化庁優秀舞台芸術奨励公演
「風の子バザール」都優秀児童演劇選定優秀賞・中央児童福祉審議会特別推薦
「カレドニア号出帆す」都優秀児童演劇選定優秀賞
「うそんこほんこ隊」都優秀児童演劇選定優秀賞
「お祭りどんぶり」都優秀児童演劇選定優秀賞
「ぼくたちの南十字星」都優秀児童演劇選定優秀賞・中央児童福祉審議会特別推薦
「ガヤガヤとムッツリのたんじょうび」中央児童福祉審議会特別推薦
「おれがあいつであいつがおれで」都優秀児童演劇選定優秀賞
「おはなしちんどん」社会保障審議会特別推薦・児童福祉文化賞推薦
「マンナム」社会保障審議会特別推薦・児童福祉文化賞推薦

劇団風の子
〒192-0152 東京都八王子市美山町1320-1 TEL.042(652)1001 FAX.042(652)1013
（ホームページ）https://www.kazenoko.co.jp （Eメール）tokyo@kazenoko.co.jp